〈地域性〉をめぐる攻防

―岡田（永代）美知代と田山花袋の描くローカリティ―

有元伸子

はじめに

ある小説にモデルがあるとされるとき、書き手は人物をどのようにまなざして記述するのか。モデルとされる人物と小説の登場人物のプロフィールが一部異なるとき、なぜそのような改変がなされたのかを考察することは、まなざしの意味を問うときに有効であろう。

本稿では、そうしたモデルと表象の異なりを、〈地域性〉の側面から考察してみたい。考察の対象は、自然主義作家・田山花袋と、花袋によって「蒲団」「妻」「縁」などのモデルとされた女性作家・岡田（永代）美知代の作品、そして二人の往復書簡である。(1)

論を始める前に、岡田（永代）美知代について簡単に紹介しておく。岡田（永代）美知代（明治一八年～昭和四三年）は、広島県甲奴郡上下町出身の小説家、翻訳家である。父・岡田胖十郎は金融業を営み、後に上下町長をつとめるなど町の名士で、母・ミナともども熱心なクリスチャンであった。美知代は、上下小学校卒業後、神戸女学院に入学して、洗礼を受けた。在学中から「少年世界」に短歌を投稿していた美知代は、明治三六年夏、田山花袋に書簡を出して入門を懇願し、許されて、翌年上京。田山家に寄宿して、津田英学塾予科に通学するかたわら、花袋から西洋文学を学んだ。しかし、同志社の学生・永代静雄との交際が発覚したことにより、三九年一月に上下町に帰郷。「新声」「文章世界」「女学世界」などの投稿雑誌に短編小説が掲載されるようになるが、四〇年九月、花袋が自身と美知代・静雄をモデルにして「蒲団」を発表し、美知代はゴシップの渦中におかれた。その後、美知代は再上京して永代と結婚し、二子を出産。明治末から大正期を通じて、自然主義の小説を発表するとともに、多くの少女小説や童話を書いた。著書に、花にまつわる挿話を編集した『花ものがたり』（大正六年）や、『奴隷トム』（大正一二年、ストウ夫人「アンクルトムズケビン」の翻訳）などがある。大正末年、永代静雄と別れて渡米し、アメリカで再婚。昭和一六年に帰国して、妹の嫁ぎ先の広島県庄原市で余生を過ごした。晩年にも手記といくつかの未発表原稿を残し、昭和四三年、八一歳で亡くなった。

花袋の「蒲団」が美知代の小説を簒奪する形で成立したこと、花袋の美知代への文化的支配の様相については、別の機会に発表した。(2) 美知代は、花袋について、晩年になってなお《恩は恩、怨みは怨み》と繰り返し述べたが、二人の関係は各時期を通じてきわめてデリケートに推移する。以下、「蒲団」「備後の山中」などの花袋作品に描かれた

女弟子の故郷の表象とそれに対する美知代の抗議を検討し、男女の師弟によるローカリティ表象をめぐる攻防の様相を考察したい。

一　花袋の描く女弟子の雪深き故郷

はじめに「蒲団」（「新小説」明治四〇年九月）に描かれた女弟子の故郷について確認しておこう。「蒲団」「妻」「縁」など一連の花袋作品のモデルだとされる岡田美知代の故郷は広島県の上下町である。ところが、「蒲団」では、女弟子・横山芳子は岡山県の新見町出身の設定となっている。

この改変については、すでに石上敏が「田山花袋『蒲団』と新見」において詳細に検討している。[3] 新見の側から「蒲団」を捉え直そうとする石上論の立論の方向性や、横山芳子の最終的な意味づけに関して、本稿とは異なるものの、「蒲団」の横山芳子の故郷を検討する上で基本的な検討は既になされている。

石上は、「蒲団」に新見町出身のヒロインが登場したことにより、新見では横山芳子の《モデル探し》がはじまり、《その結果モデルの正体とされたのが、当時、新見町内にただ一軒だけあった横内病院という開業医の娘さん》だったという興味深い挿話を紹介している。美知代の出身地が改変された理由のひとつには、モデルを好奇の目から少しでもかくまい特定されないための、いわば逃げ道をつくるためではなかったかと想像される。

また石上は、上下に比して新見は、より《山の中》にあり、より《雪深い》ことを指摘しており、これも首肯できる。「蒲団」では、女弟子の一家が熱心な《基督教信者（クリスチャン）》であり、兄も《英国に洋行》、本人も《神戸に出て神戸の女学院に入り、其処でハイカラな女学校生活を送つた》と語り手によって紹介される。そして作中の時雄は、芳子から入門希望の手紙を受け取ったあと、《書箱の中から岡山県の地図を探して、阿哲郡新見町の所在を研究》する。《山陽線から高梁川の谷を泝つて奥十数里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思ふと、それでも何となくなつかしく、時雄は其附近の地形やら山やら川やらを仔細に見》る（二）。実際に対面を果たすまえから、芳子は、《山の中》出身の《ハイカラの女》、あるいは《ハイカラの女》にもかかわらず出身地は《山の中》、という二重性をもった女性として、時雄の夢想のなかに立ち現れる。さらに、作品の結末部分を引用しよう。

《五日目に、芳子から手簡が来た。いつもの人懐かしい言文一致ではなく、礼儀正しい候文で、『昨夕恙なく帰宅致し候儘御安心被下度、〔…〕山北辺より雪降り候ふて、湛井よりの山道十五里、悲しきことのみ思ひ出で、かの一茶が『これがまアつひの住家か雪五尺』の名句痛切に身にしみ、申候、〔…〕まだ〳〵御目汚し度きこと沢山に有之候へども激しく胸騒ぎ致し候まゝ今日はこれにて筆擱き申候』と書いてあつた。

時雄は雪の深い十五里の山道と雪に埋れた山中の田舎町とを思ひ遣つた。》（傍線は引用者、以下同じ）（十一）

恋愛事件のために帰郷させられた女弟子から手紙が届き、懐かしさに堪えかねた主人公は、このあと二階の女弟子の部屋に入って置き去

られた蒲団の匂いを嗅ぐ、あまりにも有名な最終場面へとつづいていく。《性慾と悲哀と絶望とが忽ち時雄の胸を襲つた》という最終場面の感興に多大な効果を及ぼしているのが、時雄が想像する雪深い女弟子の故郷の光景であった。ただし、この雪里に帰郷した女弟子からの手紙は、美知代―花袋の往復書簡のなかには現存せず、花袋の創作である可能性も大きい。

新見町（現・岡山県新見市）は、広大な山地を抱える中国山地の町である。『新見市史　通史編』では、岡山県の気候を①北部型・②中部型・③南部型に三分し、県北の中国山地にある新見は①北部型で、《山陰の気候に近い多雨、冷涼》だとしている。[4] これに対して、上下町（現・広島県府中市上下町）も同じく山林比率が高いが、広島県を三分類すると②中部型に属する。積雪量は上下に比べて新見の方がはるかに多い。[5] 当時の上下の積雪量からして、《雪に埋れた山中の田舎町》を想起させるのは無理があろう。

花袋にとって、一連の美知代をモデルとした女弟子の故郷は雪深い地であることが必要条件だったようで、「妻」（「日本新聞」明治四一年一〇月～四二年二月）でも同様の操作がなされている。次は、入門の約束をした女弟子・てる子から上京前に届いた書簡である。

《この二十三日頃よりは、冬休暇に相成申すべく、御たよりは田舎の方に御つかはし被下度候、尾の道より十三里も山の奥、雪積りて軒には氷柱長く、谷川の瀬の音のみ高く聞え候ところに有之、唯々楽しきは、古き思ひ出多き家に、火燵囲みて父母と物語することに御座候、［……］》（「妻」三十四）

この手紙は、美知代の花袋宛て書簡二通を原材料として創作されているが、それらは明治三六年一〇月二日（B―33）・同一二日（B―34）と、[6] いずれも一〇月に書かれており雪に関する記述はない。もちろん美知代が花袋に口頭で上下の雪景色について語ったことがあるのかもしれないが、少なくとも現存する美知代の花袋宛て書簡に、上下町で雪に降りこめられた記述は存在しない。[7]

「妻」の女弟子の手紙には、原材料の美知代書簡からの改変が他にもある。てる子は、上京後に通う学校の世話を師の勤に頼み、《小女は五年を学の窓にありながら、何も出来ぬつまらぬ女にて、女子大学の英語科などには、とても入学覚束なきことと存候、止むなくば、予科になりと入学致し勉強仕度覚悟》と、英語力にも自信がないかのごとく書かれている。だが実際の美知代の手紙は、《いつそやの御言葉に女子大学にとのこと有之しやう覚候が私など何もくゝも知らぬ真につまらなき女に候へバとても入学は駄目なる可く》（B―33）と、単に勉強が足りないから女子大学に入る自信がないことを述べ、つづく書簡では《女子大学の英語科のよびかに入り得候はゞ》（B―34）と述べて、予備科に入るならば英語科であると、むしろ英語に対する自信をみせている。「妻」における女弟子は、神戸の《ミツションスクール》に通ってはいても英語力にも自信のない雪里出身の女学生に改変されているのである。

花袋は現実の美知代の故郷も〈雪深い山中〉にイメージしたかったのかもしれない。「蒲団」や「妻」の設定の原型は、現実の書簡にすでに窺える。美知代が帰郷した明治三九年冬の花袋から美知代宛て書簡

（A―32　明治39・12・16）では、冒頭の時候の挨拶に、《御地は既に木枯ふきやみ、音なき雪ふり頻り門外一歩を出てられぬやうに相成候ふや、寒き寒き裏の三畳に一人さびしく暮したまふことを思へば、言ひしらず胸を痛め申候何卒あまりさまざまのこと御考へなされずのとやかに御暮らしなさらんことを祈り上申候》と書かれている。現実の上下町は門外一歩も出られぬほどの豪雪地域ではないが、にもかかわらず、恋愛によって苦しむ美知代の孤独の舞台として、書簡のなかで降りしきる雪景色を置くのである。文化の中心である〈東京〉と恋人から遠ざけられて苦しむ女弟子の姿を描くときに、その故郷は、単なる〈地方〉であるよりは、むしろ〈辺境〉とイメージされるほどの雪深い山里である方がよりドラマチックなのだ。(8)

そして、花袋が孤独な美知代を山中の雪景色のなかにおき、いわば書簡中で〈物語の女〉と化した幻想を、美知代自身も利用した。美知代は、青年投稿雑誌「新声」に発表した小説「御おとづれ」（明治四〇年五月）において、冒頭から、先に引用した花袋の書簡をほぼそのまま引用する。後半部分で、語り手の《妾》は、《あゝ如何したら好いのだらう、先生、先生、悲しう御座います。御文を抱いて、煩はしの人目も無い書斎に駈け込んだなり机の上に打伏して、あゝ妾は此儘消えて仕舞ひ度い！》と、師に多大な心配をかけてしまうほどの自らの煩悶・苦しみを縷々述べていく。習作期の美知代は、師の花袋によって与えられた、雪にふりこめられる〈山の中の女〉のさびしいイメージを自作に積極的に利用し、自らそれに扮したのである。

二　大正四年の師弟
―「備後の山中」と『蒲団』、『縁』及び私」―

花袋は美知代が恋愛事件によって帰郷した明治三九年の一〇月に、上下町の岡田家を訪問して一家から歓待を受けている。「蒲団」が書かれたのはそれより一年近く後であるが、「蒲団」は女弟子の帰郷の場面で閉じられて、花袋の上下町訪問が作品に取り込まれることはなかった。花袋がこの出来事を書くのは、上下町を訪問してから九年後の大正四年、よく知られた紀行文「備後の山中」においてである。(9)

「備後の山中」は、《私》が府中から出雲に行く途次に上下に立ち寄って数日逗留したことを素材とし、冒頭から《一生忘れられない旅である》と綴られる。

《何故、この山の中が私の心を惹いたかと言ふと、其処の山の中に上下といふ町があつて、そこに私の弟子になつた若い女がゐた。その女は私の家に二年ほどゐたが、ある青年と恋に落ちて、そのことが知れて、父親が来て、無理やりにつれて行つたのである。私もその女が好きだつた。

その女が私を引いてその山の中を路（ママ）を選ばしめたのである。》

《私がその女を愛してゐなかつたなら、もう少し多く二人の為めに謀つてやつたかも知れなかつた。それを考へると、恋人に離れて、かういふ山の中にゐる女も可哀相だし、草津の山の中にさびしい月日を送つてゐる青年も可哀相であつた。私の心はセンチメンタルな状態になつて、感情が漲るやうに胸に押しよせて来た。

それに、私の心は絶えず女に向つて波うちつゝあつた。》

恋愛事件のために《山の中》に帰郷させられた女弟子を《私》も好きで、そのために人智を超えた力に運ばれて上下町に向かったかのように、受動的な表現をとっている。そして「蒲団」では《芳子》、「妻」では《てる子》、「縁」では《敏子》と名づけられていた女弟子は、ここでは固有名を失い、ただ《女》とのみ呼ばれて説話化される。文末は《〜ゐた》が続き、女に惹かれるようにして上下を訪ねた《七八年前》の出来事が、私にとっては既に完了してしまった遠い過去であることを示すかのようである。そして、《山の中にゐる女》も《草津の山の中》にいる相手の《青年》も、つまり志なかばにして〈東京〉から落ち〈地方〉に住まう若者たちは《可哀相》だと評され、全体に過去の憐憫の情がただよう叙情的な物語世界が形成される。

このあと《私》は、《いかにも海岸からはるばる山の中に入つて来たといふ感じのする町であつた》という上下町に入り、《女》と再会する。女の父親は、《かうした田舎町の財産家によくあるやうな書画道楽》で、《私》の前に、茶山や山陽の書、さらに《『先年、大本営が広島にあつた時、これを御叡覧に上げたのですけん……かなりその時好い方でした』》という自慢の《応挙の絵の三幅対》などを並べてみせるが、《女》は、《『父さんがこんなものを出して東京の人にはめづらしくもなんともありやしない』といふ顔をして、私と眼を見合せて笑つたりした》。また、《女》の勉強部屋には、《新刊の雑誌だの、本だの、翻訳ものだの、洋書だの、原稿紙だのか一面に散ばつて》おり、それを見た《私》は、《その狭い一間の中で、女は恋の傷に悶えてゐるのである。かう言ふと、私はたまらなく可哀相になつた》と述懐する。

《新刊の雑誌》・《翻訳もの》・《洋書》といった〈西洋〉の息吹を伝える新しい活字文化を、《財産家》の娘である《女》は購入することはできるものの、その発信地である〈東京〉からは遠く隔たっている。また、方言を話す父が見せる日本画や書は、いかに高価であれども旧時代のもので、《東京の人》が珍重すべき新しい文化（＝西洋文化）ではない。ここで、《私》は《東京の人》（中央の新文化人）であり、父は《田舎町の財産家》（地方の旧文化人）、《女》は都落ちした落魄者（地方にあって中央文化を模倣しようともがく憐れむべき者）と、明瞭にキャラクター付与がなされている。そして、東京人の《私》が、地方に住まう《女》や父を、文化的に劣位にある者として、それゆえに旅行者に叙情を喚起させる存在として、一方的にまなざすのである。

《基督教信者（クリスチャン）》・《洋行》・《ハイカラな女学校生活》といった「蒲団」には刻印されていた〈西洋〉を喚起させる要素は、「備後の山中」では、女弟子の故郷からことごとく剥奪されてしまう。[10] そして、父親が《かうした田舎町の財産家によくあるやうな書画道楽》と評されたように、上下の町も、江戸期には石見銀山からの銀を山陽側に運ぶ石州街道筋の要衝として天領代官所も置かれて栄え、明治期にも《女》の父親らの尽力によっていちはやくキリスト教会がおかれた開明的な地である、といった特質は消去されて、よくある古い地方の町の典型、《備後の山中》としてのみ描かれるのである。

《私》は女の家に泊まり、一家に歓待され、翌日も女と父親とともに別邸へ行って酒を過ごして、三日目の朝、上下を立つ。《女》は《眼を赤くして》別れを惜む。

《私の胸にも涙がこみ上げて来た。可哀相な女だ。かうした立派な財産家に生れながら、芸術を慕つたが為めに、いろ〳〵な悲哀やら苦痛やらを味はなければならないのかと思ふと、私は一層可哀相になつた。愛憐の情は漲るやうに私に押寄せて来た。〔……〕今、考へると、私はもう一生其処に行くやうなことはないであらう。女は父母に勘当されてまでも、その恋を捨てかねて、今ではその青年と一緒になつてゐる。子供が二人あつたが、一人は死んで今は一人になつてゐる……。》

この紀行文のなかで、最後まで《女》は《可哀相》で《愛憐の情》を向けるべき存在として記述された上で、上下はもう一生訪れることのない土地と見限られ、《女》の今の姿とともに、すべてが記憶の底、過去の世界に押しやられていく。

ところで、中央の繁栄とは対照的に地方にわび住まう若者を自然主義の手法によって叙情的に物語化した点で、「備後の山中」は、「蒲団」の焼き直しであるとともに、同じ作者による「田舎教師」(書き下ろし、佐久良書房、明治四二年一〇月)――日露戦争の戦勝に沸き立つ国威高揚の時に、理想を挫折させて地方のかたすみで死ぬ運命にあった薄幸の青年の物語――の焼き直しでもあるだろう。[11] だが、「田舎教師」のモデルとなった青年・小林秀三は作品の素材となった日記のみ残して既にもの言わぬ死者であったが、美知代は生きていた。そして、彼女は、かつて「蒲団」に書かれた時期のような無名の投稿者ではなく、すでに書き手として一定の舞台も持っており、沈黙はしない。[12]

「備後の山中」が収録された花袋の紀行文集『日本一周　中編』の刊行は、大正四年五月。同年九月に、美知代は、手記「『蒲団』、『縁』及び私」を「新潮」に発表して、かつて花袋が美知代を描いた二つの小説「蒲団」と「縁」とを強く非難している。明治四三年に、花袋が「縁」で美知代を描き、それに対抗するように美知代は「ある女の手紙」(「スバル」明治四三年九月)を発表して小説の形で花袋を諷したが、その後明治末年から大正三年の時点までは、現実の花袋と美知代の関係からも、花袋が美知代をモデルとした小説からも、あまり波風のない時期であった。[13] 大正四年に、美知代が突如、「『蒲団』、『縁』及び私」を書いて再び烈しく花袋を批判したのは、直前に刊行された花袋の「備後の山中」の記述への憤りに端を発した可能性が大きい。

《ですが私は本当に『蒲団』のヒロインなのでせうか。成る程私は同じ作者の『妻』と云ふ小説の終りの方に出て来る、文学好きの田舎娘が、其崇拝してゐる都の小説家を頼つて上京すると云つた身の上でした。師と頼むその作家を神様のやうに信じて、崇拝して、崇拝の極、なつかしい余りに、遠く先生の故郷にまであくがれ歩くと云つた有様でした。それから先生の嫌ひな青年とラブもしました。》(傍点ママ、以下同じ)

「『蒲団』、『縁』及び私」の冒頭近くを引いたが、《文学好きの田舎娘が、其崇拝してゐる都の小説家を頼つて上京すると云つた身の上》といった表現は、「備後の山中」の東京と地方の対比を容易に想起させる。[14] 花袋の故郷を見に行ったことまで書きつけているのも、自分だっ

て花袋の故郷（＝〈地方〉の旧い文化と生活）を知っているのだということを示威するための、すなわち「備後の山中」への対抗心のようにも感じられる。[15] 作家として相応の実績を積みつつあると自負している美知代にとって、淋しい《山の中》に都落ちした《可哀相》な過去の《女》として物語化されたことへの反発は強かっただろう。

三　方言　―ナショナリティとローカリティの交錯―

美知代が『『蒲団』、『縁』及び私」で強く花袋を非難したのは、その方言表象であった。従来も指摘されているように、「蒲団」中の方言話者は、芳子の父親と恋人の田中秀夫のみであり、これはきわめて意図的な設定であろう。美知代は、「蒲団」の女弟子の恋人の《わざとらしい上方弁》の描き方を、《熱した慾目で、私一人にさう思はれるのかも知れませんけれど、京都から初めて上京した恋人は、成る程上方流のアクセントで話もしましたが、『蒲団』の中にあるやうな、あんなデレ〳〵した言葉つきの男ぢやありません》と反駁した上で、花袋の《主観》を痛烈に批判した。

「蒲団」の田中の《上方弁》表象への美知代の批判は、晩年になってもつづく。戦後の「花袋の「蒲団」と私」（「婦人朝日」昭和三三年七月）でも、「蒲団」の《芳子の恋人田中秀夫に於ける、竹中時雄氏の描写》は我慢がならず、その口惜しさは今現在もつづいていると述べる。そして、「蒲団」のなかの、秀夫の《〜でおます》・《そないな事はありませんけどナ》といった関西方言と時雄の共通語による対話の一節を引いて指弾する。

《　私は敢て秀夫の為めに弁護する。会話の内容の如何は兎も角、仮りにも秀夫は京都同志社神学部の生徒ではなかつたか、関西地方の一部に限られた中学生たりと雖も、其土地生え抜きの土地つ児同志ならいざ知らず、幾ら明治三十七八年日露戦争中のあの時分でも、他所土地の人の前で殊には初対面の長上の前では、標準語を以てして、決して地方弁は使つて居ない。まして況や京都同志社なるものは、基督教学校（クリスチャンスクール）の御本山とも見る、全国的有名な学校で、創立者新島襄先生の感化を慕ひ先生なき後も参り来る学生は、北は北海道南は九州鹿児島に至る有様で、其寄宿舎で語られる言葉は、自然何処にも共通の学生弁でなくてはならぬ。それに秀夫は神戸教会から送られた特殊保助生で、将来牧師たらん志望を抱いて神学部に籍を置き、感話に説教に、時々副牧師代理位はつとめた青年だと云ふ、どう考へてもこの会話は受けとれぬ。》

同志社神学部の優秀な学生である秀夫（＝永代静雄）が《地方弁》など使うはずがないではないか。――ここに窺えるのは、クリスチャンであること・《基督教学校（クリスチャンスクール）》に在学していたことへの強烈な矜持である。《基督教学校（クリスチャンスクール）》において西洋文化をハビトゥスとして身体化している者は《標準語》を使うのが当然だ。[16] また、全国から学生が集まる都市においては共通する言語が必要であり、公的なスピーチをするうえでも、リスペクタブルな言語として《標準語》を使うというのだ。そこには、《地方弁》を《標準語》より劣位におく認識が底流する。

安田敏朗は、近代日本において、〈方言〉概念の成立が、国民国家の

言語としての〈国語〉・〈標準語〉の形成と密接に関係することを述べている。[17] 近代日本の方言研究が盛り上がった三つの山の最初は、明治三五年以降の《「帝国」的膨張の萌芽を含みつつ国民国家形成がなされていった時期》であった。まさに、「蒲団」に描かれた、美知代の女学生生活、上京、恋愛、帰郷といった一連の出来事の時期と重なり合う。安田によれば、日清戦争により《一等国》となった日本はそれにふさわしい言葉の《基準》（＝〈標準語〉）への希求が高まり、そうした〈国語〉に《国民精神》が宿るとされ、《流通度の高さという価値》（言語不通を解決）に加えて、《儀礼的な価値（真善美、礼節など）》も付与された。こうして、〈方言〉は、《偽悪醜》で、《近代国民国家の均質な空間を創出する上での阻害要因》と見なされ、《撲滅》し矯正すべき対象となる。西洋言語学の導入も、こうした動きと連動する。

国家的・普遍的で正しく美しい〈標準語〉と、地方的・偏頗で醜く誤った恥ずべき〈方言〉という階層関係が、帝国主義的な国民国家を形成するために作られ、利用された。《標準語》を《地方弁》の上位におき、《基督教学校（クリスチャンスクール）》の学生はリスペクタブルな言語である《標準語》を話すべく身体化されているという美知代の認識は、同時代の言語をめぐる階層関係を忠実に反映している。

こうした美知代の言語観が如実に表現された作品として、少女小説「国なまり」（「少女世界」大正二年一〇月、目次は「お国なまり」）がある。舞台は、東京のミッションスクールの女子寮で、京都なまりの直らない年若い女生徒が、外国人教師を巻き込んで引き起こしたできごとを、《東京の言葉》も英語もできる年長の女生徒と対照しながら描いている。

兼松慶子は、この春入学したばかりの一四歳。《寮の姉様達から齊しく愛好の眼》を向けられるかわいらしい娘だが、夏休みが明けて帰寮し京都言葉で話していることを、年長の後藤さんに指摘される。

《『可笑しい？』

『可笑しいって事も無いわ、だけども変よ、ね、あなたも皆なと同じに、東京の言葉におなんなさいよ、郷に入っては郷に従へって諺もありますわ。』

『えゝあたしもさうしたいと思ふのよ、さう思って居ても、つい故郷（くに）なまりが出て了ふのすせｓ。』

『そら又！』

『ほゝゝそやから故郷へ帰ると東京訛りが可笑しいって、皆なして妾（わたい）一人を笑物にしやはるんどすもの、妾もう叶はんえ。』》

しょげる慶子に後藤さんは、《今に段段直って来る》となぐさめるが、そこに小さな事件が勃発する。ペンキ職人たちに指図をするための日本語が通じず、外国人教師のキーツ先生が困惑していたのだ。キーツ先生は簡単な日本語は使えるが、少し複雑なことはその都度生徒から教わって話していた。この日は、慶子が《京なまり》で先生に教えてしまったため、東京の仕事師には通じなかったのだ。

事情を知った後藤さんはキーツ先生の側へ寄り、後藤さんを見て安心して英語で《ベラベラ早口》で話すキーツ先生の言葉を、職人たちに《通訳》して聞かせた。《呆れたやうに先生と後藤さんと、二人の顔ばかり見守って》いた職人たちは、《『偉いもんだナ娘っ児でも、流石

は女学生だい、異つたもんだ！』》とほめ、後藤さんは《極り悪げに下等な人達の傍を離れ》る。キーツ先生も後藤さんに感謝する。慶子は《なまり》を教えたことを先生に詫びるが、先生は《なまり》という言葉がわからず、今日の記念にと自分の美しい写真を二人に贈った。

この作品は、英語と〈正しい〉日本語とを使いこなす後藤さんを理想的な女学生像として提示する。慶子は方言を使ったばかりに、西洋人の先生に迷惑をかけてしまうのである。女学生たるもの、《東京訛り》を笑うような因襲に満ちた地方の視線にまどわされることなく、〈標準語〉を使わねばならないし、英語にも習熟することが必要なのだ。それでこそ、西洋人女性との親密な友愛関係（シスターフッド）を構築することができ、西洋人と一般の日本人の間をつなぐ《通訳》となれるのである。また、階層の方がジェンダーよりも上位に置かれていることにも留意したい。英語のできる女学生の方が、男性の職人《下等な人達》に優越する。

こうして美知代は、少女雑誌の読者である少女たちに、英語と共通語の重要性を啓蒙する。[18] 年少の慶子も、いずれは《京なまり》が《直り》（矯正し）、英語も上達して、後藤さんのようになることができるだろう。女学校・ミッションスクールは、少女たちの言語や身体的ふるまいを西洋化・東京化していく装置なのである。

こうした少女小説をすでに発表していた美知代が、花袋の「備後の山中」発表を契機として、再び過去の花袋小説「蒲団」や「縁」を取り上げ、とりわけ登場人物たちの方言使用について反撃したのも当然だろう。言語こそが、ナショナリティとローカリティの交錯する主戦場の一つだからだ。美知代にとって、自らや恋人・親族が《地方》の指標である方言話者ではないこと、すなわち《西洋》・《中央》に身体化されてあることは譲れない一線だったのである。

おわりに

ここまで見てきたように、花袋は、オリエンタルな視線によって女弟子の故郷を旧い日本・〈辺境〉のごとく物語化することにより、自らを西洋文化に近い〈東京〉に位置づけ、近代日本の小説家たらんとした。その際、男性ジェンダーの優位性は疑われることはない。自然主義者・花袋にとって、女性、そして地方とは、まなざされ、語られるべき存在なのだ。これに対して、女弟子である美知代は、キリスト教学校仕込みの英語、標準語、あるいは洗練されたハイカラなふるまい、といったリスペクタブルな身体によって対抗しようとした。西洋中心主義と近代的な上昇志向という点で、実は両者は一致する。

美知代の認識では、《方言》を排し、《共通語》を使い、英語に習熟すれば、女性であっても〈西洋〉・〈中心〉に近づくことができる。にもかかわらず、女性が一方的にまなざされ、他者化されるのはなぜなのか。後年の美知代は、自身のポジショナリティとして作品発表の舞台を少女雑誌に移すが、それは、ジェンダーによる差別を嫌い、女性同士の友愛関係を希求したためなのかもしれない。

それ以前の自然主義作家としての美知代は、自らの故郷である上下町や、滞在経験のある地方（千葉や大分など）を舞台にした小説をいくつも書いている。作品に登場する人物も、赤貧の小作農、排斥にあうキリスト教徒の学校長、地方の素封家の母娘など、実に多様である。美知代は中央志向の強い作家だといちおうは見なせるものの、多元的

な文化を認めなかったわけでは決してなく、一方で自分の故郷は愛しており、自身の家や門地にも強い誇りを抱いていた。のちにストウ夫人の『アンクルトムズケビン』を翻訳したように、人道的な姿勢も強い。花袋との関係で痛感させられたジェンダーのはらむ差別や文壇における力学をも感受していた。

そんな美知代が、《女》で《自然主義作家》であることにどのように折り合いをつけて作品を執筆したのか。[19] 興味深い課題だが、美知代作品における地域性についてのさらなる検討は、別稿に譲りたい。

注

（1）美知代については、有元伸子「広島の女性作家・岡田(永代)美知代研究（1）―研究の現状と課題」（「内海文化研究紀要」三九、二〇一一年三月）、「広島の女性作家・岡田（永代）美知代研究（2）―著作の概要」（「広島大学大学院文学研究科論集」七一、二〇一一年一二月）を参照。

（2）広島大学国語国文学会平成二四年度研究集会での口頭発表「〈作者〉をめぐる攻防―田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説」（二〇一二年七月八日、於・広島大学）

（3）『大阪商業大学論集』五―三、二〇〇九年九月。以下、石上の論とは、この論文を指す。石上は以下に引用するように、花袋が芳子を《純粋》・《純朴》に描くために、上下より山深い新見を選んだとプラスのイメージで解釈しており、本稿の立場とは異なる。

《『蒲団』の「雪」には、おそらく芳子の白く美しい肉体が幻視されており、またそこには、あくまでも芳子が純粋であってほしいと祈る時雄のせつない思いが重ね合わせられているだろう。その意味で、むしろこの「雪」を自然な情景たらしめるために、上下より山深く、また雪深い新見が『蒲団』の横山芳子の郷里として選ばれたことは、十分想像できることである。》

《山陽道や海岸線からの距離でいえば新見町は上下町の倍もある。同程度の距離を求めれば、備中の伯備線沿いでは高梁が該当する。ヒロインの出身である素封家を描く場合にも、文化的なレベルの高さでも新見に引けはとらない。しかし高梁は選ばれなかった。これはおそらく花袋が、「横山芳子」の出身地を、現実以上に山深く設定し、それゆえに純朴であるというイメージで染め抜きたかったからであろう。》

（4）新見市、一九九三年

（5）新見市・上下町ともに、現在も降雪の観測所はおかれておらず、管見では、刊行物に両地点の積雪の統計は見つけられなかった。広島地方気象台防災業務課に問い合わせたところ、たまたま明治四〇年の「区内月表原簿」に上下を観測点とする記録が残されていた。それによれば、明治四〇年に上下町で降雪が観測されたのは一七日で、降雪量は〇・〇寸（四日間）から最大で五寸（二日間）、最多降雪量が〇・〇寸と一寸（各四日間）であった。岡山地方気象台防災業務課でも精査いただいたが、残念ながら新見の積雪量に関する記録は無かった。新見に最も近い観測地点は千屋で、近年の計測値だが、一九九一年には、降雪三二日、日降雪の最大が四四センチである。両気象台に感謝申し上げる。

（6）以下、田山花袋と岡田美知代の書簡はすべて『田山花袋記念館研究叢書第二巻　『蒲団』をめぐる書簡集』（館林市、一九九三年）により、記号番号は同書の整理番号である。

（7）上下に帰省・帰郷した時期の美知代の花袋宛て書簡には、尾道・福山（鞆ノ浦）・広島・神戸などへの中短期の遊覧や紹介記事も頻出するが、こうした温暖な瀬戸内海沿岸の都市や町は、花袋作品における女弟子表象にはほとんど採用されることがない。

（8）〈西洋／日本・東京／地方・辺境〉といった本論文の基本構図については、福間良明『辺境に映る日本―ナショナリティの融解と再構築』（柏書房、二〇〇三年）から触発された。福間は、同書の序章において、〈辺境〉を《〈近代文明〉の位階構造において下位に位置するものとして認識され、日本という自画像を描くうえで、他者として参照された空間》だと定義し、それは《実態として存在するものではなく、言説空間において、「西洋」や「日本」との対照において周縁的なもの、位階構造的に下位にある

ものとして語られる、一つの理念型》だと述べる。

（9）『日本一周（中編）』「備後の山中を経て三次へ」博文館、大正四年五月

（10）助川幸逸郎は、「蒲団」の「時雄」という命名には「TOKIO」（東京）が含意され、「〈時＝今〉を、東京で求めている男」で、芳子も《「ただ者では終わりたくない」野望》をもって文学者を志望する女だと述べる。また、《キリスト教は西洋文化の中核》であり、芳子の家や田中がクリスチャンであることは、「時流に乗った」・「ただ者でないヤツがすること」という点で時雄が教える西洋文学と拮抗すると見なしている（「第七章　「トレンディ作家」としての田山花袋」田上・黒木・助川編『〈人間〉の系譜学』東海大学出版会、二〇〇八年）。

（11）花袋は、《私はその日記の中に、志を抱いて田舎に埋れて行く多くの青年たちと、事業を成し得ずに滅びて行くさびしい多くの心とを発見した》と述べる（「田舎教師」『東京の三十年』博文館、大正六年）。

（12）岡田美知代は、明治四二年五月に筆名を永代美知代に改め、「スバル」「中央公論」「婦人評論」などの文芸雑誌に小説を発表するとともに、「少女世界」「ニコニコ」などに多くの少女小説や子ども向け読物を執筆している。大正三年にはのべ二一編、大正四年には一六編の小説・少女小説を雑誌掲載していた。注1の拙論参照。

（13）宮内俊介が、「蒲団」以降に美知代が登場する花袋作品を検討している（「横山芳子のその後―「妻」から「男の胸へ」」『熊本学園創立50周年記念論集』一九九二年五月→『田山花袋論攷』双文社出版、二〇〇三年）。

（14）美知代は、入門を乞う最初の書簡（B―1、明治三六年七月八日）で、花袋の作品《ふる郷》によって《敬慕の情》が高まったと述べている。「ふる郷」（新生社、明治三二年）は、《都にてのわが悲しき歴史》をもつ落魄した《われ》が《あれ果てたる故郷》を訪ねるという、叙情的で紀行文的要素の強い小説である。田山家は旧館林秋元藩の士族だが、花袋の父・鋼十郎が西南戦争で戦死したために困窮し、少年期の花袋は一時期、東京で丁稚奉公もした。花袋も地方から上京した者の一人なのであり、小説「朝」（「早稲田文学」明治四三年七月）に登場する少年は、《東京に行きさへすれば、どんな目的でも達せられる。何んな豪い人にでもなれる》と思う。

（15）佐藤八寿子は、《花袋は、基本的には江戸時代から続く漢学の教養を身につけた知識人だった。苦学して身につけた英語で渉猟した英米文学も、それにふれる場は上野の図書館と日本橋丸善の洋書売り場などであり、ミッション・スクールという磁場の中での、たとえば男女を問わず文学について自由に語り合うなどといった生の経験はしていない。それだけに、彼のハイカラ女学生への憧憬は強く、女弟子からうけたカルチャー・ショックは大きいものだったのかもしれない》と述べる（『ミッション・スクール―あこがれの園』「第二章　ミッション・ガール―明治から大正へ」中公新書、二〇〇六年）。

（16）佐藤八寿子は、日本人は「ミッション・スクール」に《近代的で、自由で、洗練され、かつ上品でリスペクタブル》なイメージを抱いていると述べる（注15「序章　ミッションスクールとは何か」）。

（17）『〈国語〉と〈方言〉のあいだ―言語構築の政治学』人文書院、一九九九年

（18）「少女世界」の「国なまり」掲載号には、巌谷小波が《朝鮮満州地方のお伽講演会》に出発したことを報じる短信が掲載され、《新領土の少年少女は、はじめて先生のお噺を聞くことが出来るのですから、さぞ喜んで迎へつゝあることでございませう》と結ばれる。帝国化した日本において共通言語の確立は急務であり、美知代の少女小説もその一翼を担っている。

（19）トリン・T・ミンハは、有色人の女の作家という《三重拘束（トリプル・バインド）》のなかで《書く》ことの困難さを述べる。西欧／男性という規範を利用しつつ、いかにそれを超えて語る主体を形成するか、《書く行為が言語のなかに折り込むものは》《主体の複雑な位置》なのである（「Ⅰ　無限に映し合う「書きもの」の……」『女性・ネイティヴ・他者―ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳、岩波書店、一九九五年＝原著一九八九年）。

付記　本研究はＪＳＰＳ科研費（23520227）助成による成果の一部である。

（ありもと　のぶこ、広島大学文学研究科教授）